

Title	10代が子どもを産むことに関わって
Author(s)	伊藤, 悠子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 6, p. 9-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10405
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

10代が子どもを産むことに関わって ——ある産婦人科の試み——

伊藤悠子

聴き手：大北

1 ある産婦人科の試み

私は、大阪市内の繁華街にほど近い病院の産婦人科で外来部門の看護マネージメントの任にあり、私の他、3人の非常に有能な助産婦さんと組んで働いています。そこは、10代妊婦の割合が多くて、それは全国的なレベルと比較してもはっきりしています（ちなみに、全国平均では、総分娩件数に10代が占める割合は、97年には0.71%、98年には0.68%、これに対して当院では97年には6.3%、98年には5.3%、99年には8.6%）。日本全体で見ると、10代で妊娠すると今2/3以上の方は人工妊娠中絶を選択しています。妊娠12週未満で認められている掻爬手術の時期を過ぎてしまうと、大変危険な、陣痛を人工的に起こす中絶方法が22週未満まで合法的に出来るんですけど、その段階も過ぎて出産せざるを得なかったり、全く医療機関を受診しないまま出産をて10代の出産はとらえられているんですね。私の勤めている病院でも、従来はそういう傾向が認められました。ところ

が、年々、はじめから出産を希望して来院する人が増えてきまして。本当にびっくりするような早い時期から来るんです。妊娠週数8週あたりから超音波で赤ちゃんの心臓の動きは確認できて、それが「妊娠」の確定ということになるんだけど、そのころ初診なら、まあ初期の受診なわけです。しかしですね、うちの病院に来る10代は、4週とか5週とか早い段階から妊娠を予測して受診に来ます。そこで、10代妊娠のパターンが変わってきたことをうけて、私たち産婦人科は、これまでの取り組みをまとめながら、10代妊娠の支援体制を作っていこうとしています。

というのも、まず10代の妊婦さんたちの多くは、親がその妊娠の事実を知らないのがほとんどなんです。それに、10代同士のカップルでは仕事も限定されるし、そのほとんどが流動的労働形態で、女の子も仕事は制限されていて、アルバイトも、妊娠とともにやめざるをえない。だから、経済的には不安定で日々の生活パターンも不規則となりがちです。生活基盤が安定しないせいでパートナー

との関係もうまくいかなくなっていて早くから喧嘩別れしてしまうことも多いです。そのため起こりうる育児放棄・虐待を前もって防ぐ必要もあって、月1回保健所との連絡会議を持って、連絡体制をとってきました。これをより実効的なプロジェクトとして進めていこうとしています。

実効的ということでは何を意味しているかということなんですけど、10代の妊娠の数を減らしたり、防いだりということではないんです。今まで10代妊娠といえば、「生活設計のない未成熟で不純な性交渉の結果であり、未然に防がなければならない」ととらえられていたし、確かに10年程前までは、法的な時期を越えてしまって、産むしかなくなっていて、養子縁組前提で施設とか、連れて帰っても本人はどこかへ行って赤ちゃんの祖父母が育てていることが多かったですね。だけど、今うちの病院に来る10代の妊婦さんたちは、意識的に早い段階から子供を産みたいと言ってくる人が多くて、まあ一言で言えば明るいんですよ。「赤ちゃんの血液型が合わなかったらヤバイな」とか言う人もありますが、深刻ではない。

確かに、さっき言ったようにもし赤ちゃんが産まれたら生活に困るはずなんで、そのことも当人は分かっていますし、10代妊娠をめぐる環境は変わってないんですけどね。親の理解や周囲のフォローがえられないとか。それでも、彼女たちはすごく妊娠を喜んでいて、出産を楽しみにしているんです。不安は高く、それが親との関係なんかで解消できない環境があるので、受診日でない日にも、どんどん訪れてきたりするんです。そこでね、確かに虐待や育児放棄の可能性があるとということで支援をしていこうとしているんですけど、

だからといって頭ごなしに妊娠したことを非難したり防止しようとするのでは何にもならないと思うんです。そうではなくて、そのまま出産するにしても、もし仮に中絶という結果を選ぶにしても、その経験が彼女たちの成長の上でも生きるような援助、、、それが実効的といってる中身の一つかなあ。

それから一般的ではない事例ですけど、望まれなかった赤ちゃんの出産には、一生懸命やっても私たちずっと辛い気持ちが残りますね。おっぱいをあげたりすると情が移るからやめて、と当事者の保護者の要望があったり、せめて施設に入所するまで母乳だけはあげたい、と言ってこられる方とか、さまざまなんですけど。妊娠期間、密接に関わった10代でも、そういったケースでは道であってもこちらが気付いてない振りをしてますね。向こうから声をかけてきて、勤めているスナックの名刺をくれたりするんですけど。確実な避妊方法の選択肢がない現状ですから、そうした問題ももちろん10代支援のプロジェクトのなかみに入ってきます。

2 「親密さ」とセックス

しかしここ数年、ほんとに女の子の方が一方的に変わってきてますね。

周りは相変わらず、10代妊娠は恥ずかしいとか、隠したりとかがあって、西日本のある大都市からお産を目的にうちの病院にやってきた高校生カップルがいますが、彼女の方は聞けば裕福な家庭のお嬢さんで、大阪に来るまではずっと自室に軟禁状態でした。妊娠の事実を誰にも知られるな、ということで出産されたことは姉妹にさえ知らされなかったで

す。他の施設で、比較的10代出産が多いところでは大阪府立母子総合医療センター、そこでは総分娩件数に占める10代が93年に出されたデータで1.1%なんですけども、そちらでは10代で出産される場合、出来るだけ早期から妊娠期間「教育入院」してもらおうということでした。ローティーンの場合は集中的な心身のケアや母親になる準備教育も必要かと思いますが、近隣の目から隔離させて内緒で出産される方も多いので、というお話を聞いています。

それと、当地域でも10代カップルの男の子の方の雰囲気はあんまり変わってないですね。親御さんに来ていただいてお話が出来るまでに持っていくと、赤ちゃんが産まれることで、男の子の方が少しは更正するんじゃないかと最終の期待をかけていることが分かります。実際には子が出来たっていきなり自覚を持つことはないから、妊娠に希望を託そうとするとうまくいかない。でも、女の子のほうは出来てしまったら、産んだらいいやんって感じで、出来るかもしれないと思っていた子がほとんどなんです。避妊していますという人でも、使い方が分かっていないの。コンドームを使っているというけどね、よく聴いてみるとコンドームを置いているだけ。枕の上にあけないでおいているの。あと、ほとんどが膈外射精で避妊だと思ってる。とにかく、絶対に妊娠は避けなきゃとは思っていないですね。

それで、さっきもいったような形で、彼女たちの経験として活かしてもらいたいという考えからね、赤ちゃんが生まれれば生活が困ることは分かっているのになぜ妊娠を喜んでいるのかなと考えるんです。育てられるかどうかということよりも、まずどうして産みま

すと言ってくるのかということを理解しないと頭ごなしになりますからね。

何でなんだろうと思ったらね、人寂しさとかがね、生まれてもいいかということで避妊していないんじゃないかと思うんです。確かに、10代に限らず、避妊するかしないかということが、とりわけコンドームを着ける着けないということが男の人にゆだねられていて、女の人が言い出しにくいということが挙げられると思いますが、女の子たちが妊娠を喜んでいるのは事実です。親に週数をごまかして、もう中絶できないと嘘をついてまでして産もうとする人もいるの。困るはずの状態なのに、本当に妊娠を喜んでいて、そもそもセックスするというのが単に快楽を得たいというだけじゃなくてね、その瞬間の快の刺激を求めてというんじゃないくて、、、でもこれは解釈だなあ。

彼らや彼女たちはね、生まれたときから両親とも働いていて、過酷な労働形態で働いている両親のもとで育ってきている子が多くて、「チューリップのアプリケ」じゃないけど、親は24時間いつ働いていつ家にいるか決まってない。それで、ほとんどの子が物心つく前からしっかり親に抱かれたりとか、抱かれている間、親の体温を感じるとか見つめてもらうとか、母乳をもらうとか。ただそれもね、そういった良好な親子の関係がなければだめだというんじゃないくて、たとえば親だっていらいらしているときがあったり、それでたばこを吸って母乳の味が変わったり、機嫌のいいときとそうでないときの声のトーンが変わったり、そういうことも赤ちゃんは経験していると思うんです。そういう経験の反復が、自他の区別や他者との親密さの形成へとつながっていくんじゃないか。

そういうことを知らなくて育てていて、子供だけでご飯を食べたりとか、遊び仲間も同じパターンで、最終学歴も中学ということになると、若年の性交渉は非行とみられるけど、さっきいったような幼少期の体感覚を、思春期になって取り戻そうとしているみたいで、思春期の性に関心を持つ時期に体の接触を求めたりセックスすることで安心しようとするというのは、親密さの一つの切実な表現としてすごく納得できるというか、、彼女たちは言葉を通して他者と関わろうとするのではなくて、セックスによってギリギリ自分を表現し、自己肯定しようとしているように思えます。でも、やっぱり解釈だなあ。

ただそう考えていくと、セックスだけでなく、妊娠している状態や赤ちゃんを産むということ喜んで受け入れるということも関連しているような気がするんです。

何だかこれだけでは一方的な解釈にすぎないようで、もしもっと具体的な事情や彼女たちの様子などを語ることが出来れば、もう少しその解釈が一方的ではないというか。そもそも10代妊婦たちが私たちの関心を引っ張って行って、彼女たちの生活レベルに関わっていかうとすると彼女たちが置かれている状況やその記憶に関心を持たざるを得ないんですね。そのレベルに行くと、医療の範疇を超えるとして関せず、という医療職の方が世間では多いんだけど。たとえば、通常妊婦検診では、尿検査をしたり体重を測ったり、正常と異常を比較してチェックするということになるんですけど、うちではたとえば尿蛋白が出ていたら、昨日のご飯はいつ何を食べたのか紙に書いてもらって、すると野菜なんかほとんど食べていないとかが分かって、教科書的な食材とかどこで売っているか知らな

かったりするんです。するとその人の背景に入り込まざるを得ない。だけど、それらの細々したことを、ここで引き合いに出してしまうと家庭環境にさかのぼってしまっって、人物が特定される恐れが伴うので出せません。彼女たちのことを、これ以上は具体的には語れないんです。

けれども、それが彼女たちの日常生活だったし、そういった社会的な状況の中で生まれ育ってきたわけですよね。親が悪い家庭環境が悪いというのではなくてね。そこで10代の方が子供をもって、確かに庇護者として十分な役割をすぐに果たせるかということそれは難しいかもしれないですけど、だからといってその妊娠を非難するということは、たんに彼女たちの生存を否定しているだけなんじゃないかと思うんです。彼女たちは、自分が置かれた状況の中で妊娠出産を肯定的に受け入れようとしていて、そのことと彼女たちの生存を切り離すことは出来ないと思うんです。

望まれる健全な家庭にだけ子供は産み育てられるべきだと誰が言えるのか。「健全な家庭」という価値観を信じ語ることが出来るのは、それが出来る条件に置かれているというだけなんじゃないでしょうか。そういった条件についての考えなしに、「健全な家庭」という常識を主張し、それを基準に10代妊娠を判定するというような否定的な姿勢が、当事者を圧迫し排除しています。

3 変化に関わる

それで、話はいかに10代妊娠に実効的に関わっていけるかということなんですが、彼女たちは今まさに成長発達過程にある10代

Métier of the Clinical Philosophy

の思春期のさなかですよ。思春期の発達課題であるアイデンティティの形成は17歳から19歳の間で確立されるといわれていて、その期間が早まり、かつ延長しているという話もあります。当事者が若年であるほど、赤ちゃんより自分のことに関心が向くのは無理のないことなんじゃないかと思うんです。赤ちゃんといえば、全面的に親に依存しないと生命を保つことが出来ないし、生理的欲求を非言語でしか訴えられないような、圧倒的な他者なわけで、そういう時期にある妊婦さんたちが親として振る舞ったり育児にふさわしい環境を作ったりすることは、本当に大変な仕事なんですよ。

でも、そういう時期にあるということは彼女たちが変化していく可能性を秘めているということですね、実際本当に変化して行くんです。そういう彼女たちの主体的な変化を支援していくことが実効的と言えるんじゃないかと思っています。従来通りの育児教室という形で、一方的にお教えしますという感じではね、長時間いすに座って話を聞くという習慣に乏しいし、そういうしかたで関わっても伝わらないし話が出来ずに逃げていってしまう。予防接種一つにしても、保健所が母子手帳を発行するとき同時に案内を渡すんだけど、それでは伝わらなくて赤ちゃんを病気にさせてしまう。でも、一度に多くのことをつめこむんじゃなくて、そのときそのときの彼女たちの表情や、身体に現れている反応をしっかりと見て、当人の関心に即して関わって行くとね、伝わるし話ができるようになってきて看護婦さん聴いて聴いてという感じで話しかけてくる。20歳をすぎるとなかなかライフスタイルを変えとなると大変だけど、10代はほんと柔軟で、今まで日に1食しか食べてなかつ

たのに、表を渡して3食食べるように食べたものを書いてもらうとね、すぐ次の日から、まあ内容はともあれ、スナック菓子だけではない3食になってるんですね。砂漠が水を吸うようにどんどん変化して行って、そういう変化するものに関わるというのは楽しい。彼女たちの明るさ、そして変化の幅の大きさに、むしろ救われ教えられているのは私たちなんです。そういう変化を見せる彼女たちの姿というのはね、こちらの在りようをまさに鏡と

この文章は伊藤悠子さんが語ったものを聴き手である大北が聞き取り文章にしたものです。

